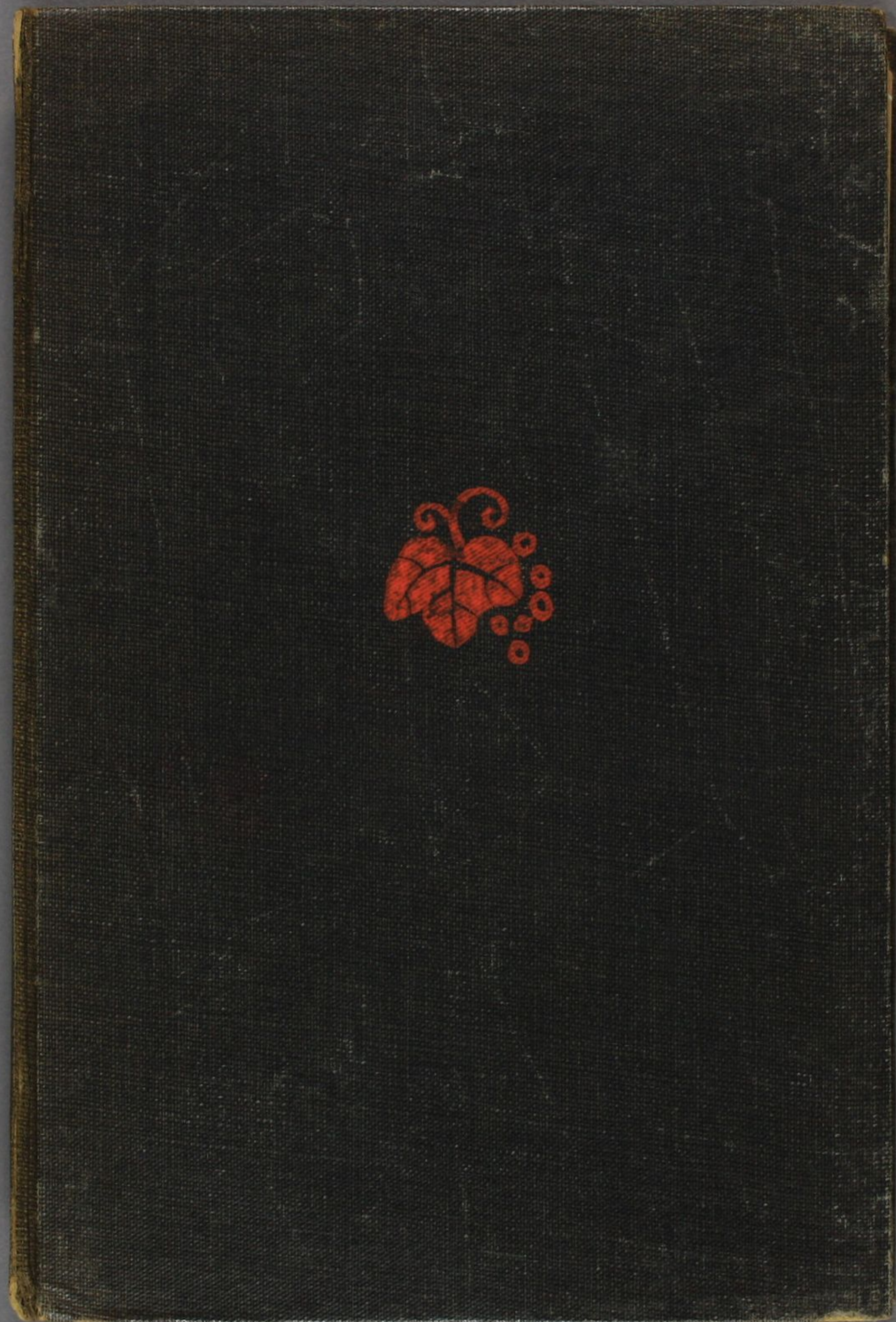


類集 無名氏著 西川石子



此 成

天邊村止

いしとと 胸に響きたり

夕イナイトの

山石を引くこと

千九百廿年カ著再版の

著

著

日本に於ての法の適用をうけ

天邊村止の度分をうけたるカ著也

能定のたぬ南星才

内 貴

清

海 標

歌集
無產者
附戀愛篇

西川百子著

河上肇博士無產者歌

厨川白村博士戀愛篇跋

京都弘文堂書房

歌 集
無 産 者
附 戀 愛 篇

西 川 百 子 著
河 上 肇博士無産者跋
厨川白村博士戀愛篇跋

京 都 弘 文 堂 書 房

十二年目の命日に

著者

わが處女歌集を

禮譽妙讚智月禪定尼の

奥津城にさゝぐ

自序

一、「わが心のうちには二人の我がある」
古の哲人は嘆息した。私の胸のうちにもまた男性的の猛烈なる抵抗心と女性的な弱々しい回避心とが對立してゐる事に會ひ物に觸れ、兩者は絶えず睽離反目の態度を激發する。これが心理學的に所謂自己分裂の現象であるか乍麼か知らない。唯このここに依つて自分の心の平和は不斷に脅され自分の生存に

堪ぬ難い煩悶と苦惱を覺え、いらくして見たり溜息をついたり、或は憤怒し或は涕泣して歸するこころを知らざるは、自分として否む能はざる事實である。この二つの心は或は自分を蕩兒として産を捨てしめ又は海を航して朝鮮に六年の商店員生活を送らしめ、或は轉じて學究子たらしめ將た現在の如く自分を新聞記者たらしめて居る。またこの二つの心は事業より事業を逐はしめ、戀より戀に憧れしめ、自分に對しても他人に對しても不満を感ずるこ

同時に愛惜を感じ他人を責めんとするとき、その責めんとする我を省みて我を責め、これによつて竟に他人を責むる能はざるに到つてや反つて自ら責むべくして責め得ざりし我をも責むるの矛盾撞着を演ぜしめずんば止まぬ。「何事にもおぎくする身思へば涙含る」るこころもある。「生甲斐のありこいふこころ敵つくるこころ」も強がつて見るこころもある。あゝこの慘愴たる胸裡の争闘が收つて渾然たる圓融統合の心境に達するはいつのこころであるう。一卷

の「無産者」に「戀愛編」はこの苦しい慘めな私の内
部生命の歴史を綴つたものにして、將た呪ふべき慙
うした私の争闘の形見として抑へ難き憎みを思は
しめるまゝにも、私をしてその折々の我を憊ばせま
た一種言ふべからざる愛慕を感じしめる。

二、作歌の態度については、從來の自分は單にクラ
シカルなロマンチシカルな技巧を精神を是認し
て居たものに過ぎなかつた。即ち自分の脳裡にま
づ一定の詩歌的のタイプがあつて自分が自然現象

又は人事現象に對して起したまことの感情を、直ち
に發露するこゝなく一端斯くの如きタイプに當簍
めこれを洗練し陶冶するこゝを最も藝術的なゆき
かただと思つて來た。然るにこの態度は既往一年
間に於て漸次自分から離れて行つた。即ち自分は
自然現象又は人事現象に對する場合、まづ以て有ら
ゆる因襲的感情を排し直ちにそのまゝ單なる一人
間としての自分になつて當面の自然現象又は人事
現象に衝つかり當該現象のうちから生々しい現實

性を掴むで、少くも人爲的の見える技巧や彫琢を捨て所謂あらけづりのまゝ、これを藝術の壇上にさし出す事が最も藝術的價值ある手法なりと信ずるに到つた。そこで作歌に對する私の態度が斯く激變した以上、私の舊作は大部分之を反古として棄つるの外なきこゝなつた。故に本歌集に蒐録した舊作は僅に一部分のみであつて、而してそれはその歌の巧拙如何に拘はらず私の内部生命に深き交渉を有し、私にまつてはこれまた私の分身たりとする

を疑はぬものばかりである。

三、歌に對する自分の見地の一變するに相前後して、自分が社會生活に對する思想感情もまた著しく動搖して來た。まづ「貧乏讚」によりてその命題の示すが如く隱忍の精神を回避の態度を支持して、消極的に貧乏趣味を詠歎し貧乏生活に諦めを安心を求め、一方また貧乏生活に對して遣瀨なき悲哀を苦痛さを感じながら、その悲哀苦痛のうちにさへ一種の憧憬を見出して社會的生活の基調をこゝに求めて

居た私は端なくも河上博士の貧乏物語を繙けるを
動機とし、米田庄太郎先生を始め各専門學者の説に
教へられて、社會現象としての貧乏を潛心探究する
に及んで、その原因は所謂自然の命運にあらずとい
ふこと、即ち貧乏人として貧乏そのものがその人に
對し先天的に約束されたものでなく一にこれは
現在社會組織の缺陷に職由するを知るに及んで、私
の胸中には斯くの如き社會組織に對する男性的激
情の猛然として湧起し來るを禁じ得なくなつた。

こゝに於て曩日の貧乏趣味は貧乏否定となり、貧乏
讚は貧乏呪咀の叫びとなり、私の口を突き出でず
んば止まない。即ちこのことは私一個の爲めに高
調するのではない。私の見地は社會多數のこの叫
びを如何にせんやと言ふにある。而して貧乏問題
の解決を物質的方面に求るを以て足れりませず。
進んで貧乏人の人格的主張を識認するにあらざれ
ば、斷じて完全なる社會組織は實現さるべきにあら
ずと信するに及んでや自分の叫びはまさしく歐米

各國に於けるが如き資産階級に對する無産者階級のそれと共鳴すべきものなることを確め得たのである。

四、こゝに於て私は最近に到つて單に筆の人として労働問題並びに労働運動上の現象を報道又は論述するにのみ止めず、講壇に立ちても又該問題並に該運動が嘗に賃銀値上げ労働時間の短縮その他労働條件の改善を以て能事終れりすべき性質のものにあらずしてひろくプロレタリアの人格的主張

を極力實現せんとするものに外ならざるところを宣傳するに努むることとなつた。即ちこは私がこれにより聊かにも我國の資産階級を始め社會一般に本問題並に本運動の理解をすゝめ、その理解によりて彼等をして今や時々刻々襲來しつゝある資本對労働の激烈なる階級闘争の勢ひを幾分にも緩和すべき方法を考究せしめんとする微意に出づるものであると同時に私の處女歌集に無産者の命題を附したる所以もまた私がこれら最近の心的過程を

語れるものに外ならぬ。

五、従つて本歌集には無産者こ交渉なき歌は悉くこれを「戀愛編」中に收めたのであるが而かもなほ集中の歌のうちに無産者こして表面直接の交渉を有せざる歌をも幾分蒐録せる所以は、私はこれによりて作者こしての私が最近の傾向に到るまでの心的過程を表はせるものこして強いてこれを除去する能はざりし結果である。而して私がこの最近の見地より出發せる作歌上の歸趨が將來那邊に向ふべ

きやは更らに第二第三の「無産者」の編せらるべき日を待たざるを得ぬ。有體に云へばこの疑問こそは現在私自身研究の標的こしてゐるこころである。

六、本歌集を上梓するに當り、貴重時間を割きて玉稿を賜はりし河上厨川兩先生並に魯鈍なる著者が社會現象の考察に對し常に多大の指導を措み玉はざる米田庄太郎先生の御原誼を深謝し、なほ装幀こ挿畫を擔當されし中山泰輔君及び高山義三、東忠續、平田嘉一三君が歌本集出版に對し與へられたる

援助を徳こして止まぬ。

千九百十九年十一月上旬

大阪毎日新聞社京都支局樓上にて

著者

無産者目次

上篇

貧乏譚(十三首).....	一頁
露西亞(五首).....	八
血の如き色(十三首).....	二
五人の死(三首).....	八
小作人の死(九首).....	二〇
温情主義者へ(三首).....	二五
大學の門を潜りて(七首).....	二七

生活(十三首)……………三
 敵(五首)……………六
 病床語(十七首)……………一
 岩倉精神病院にて(五首)……………五〇
 コルキイを憶ふ(三首)……………五三

下 篇

續貧乏譚(十九首)……………五五
 米暴動を憶ふ(九首)……………六〇
 徳川公の貧民窟視察(五首)……………七〇
 東海道線衝突(七首)……………七三

三等車(五首)……………七七
 丹後路(九首)……………八〇
 行く年(七首)……………八五
 人間の血(七首)……………八九
 異安心(十一首)……………九三
 流離(廿七首)……………九九
 黙禱(十七首)……………一〇三
 寒題目(九首)……………一〇七
 中年の顔(九首)……………一一三
 貧民窟(九首)……………一二三

所有主(十一首)……………二七

無産者の跋……………法學博士河上肇…二四

戀愛篇

初春(十四首)……………一

黒髪(八首)……………六

日淨尼の君へ(二首)……………九

君を戀ふこ(十四首)……………一〇

女心(十四首)……………一五

女より女へ(二十首)……………二〇

大和路(五首)……………二七

戒名(十七首)……………二九

白帆(五首)……………三三

艶女(二十首)……………三七

知音(十一首)……………四〇

出雲大社(二首)……………四四

火の海へ(五首)……………四九

旅路の秋(二十一首)……………五二

戀愛篇の跋……………文學博士厨川白村…五五

装幀及挿畫

中山泰輔

無産者 上篇

目次

第一章 無産者の概観	1
第二章 無産者の種類	10
第三章 無産者の権利	25
第四章 無産者の義務	40
第五章 無産者の救済	55
第六章 無産者の保護	70
第七章 無産者の管理	85
第八章 無産者の清算	100
第九章 無産者の相続	115
第十章 無産者の遺贈	130
第十一章 無産者の債権	145
第十二章 無産者の債務	160
第十三章 無産者の訴訟	175
第十四章 無産者の執行	190
第十五章 無産者の強制執行	205
第十六章 無産者の強制執行の程序	220
第十七章 無産者の強制執行の效力	235
第十八章 無産者の強制執行の消滅	250
第十九章 無産者の強制執行の再行	265
第二十章 無産者の強制執行の抗告	280
第二十一章 無産者の強制執行の控訴	295
第二十二章 無産者の強制執行の上訴	310
第二十三章 無産者の強制執行の執行停止	325
第二十四章 無産者の強制執行の執行再開	340
第二十五章 無産者の強制執行の執行中止	355
第二十六章 無産者の強制執行の執行終了	370
第二十七章 無産者の強制執行の執行完了	385
第二十八章 無産者の強制執行の執行取消	400
第二十九章 無産者の強制執行の執行無効	415
第三十章 無産者の強制執行の執行無効の取消	430
第三十一章 無産者の強制執行の執行無効の再行	445
第三十二章 無産者の強制執行の執行無効の抗告	460
第三十三章 無産者の強制執行の執行無効の控訴	475
第三十四章 無産者の強制執行の執行無効の上訴	490
第三十五章 無産者の強制執行の執行無効の執行停止	505
第三十六章 無産者の強制執行の執行無効の執行再開	520
第三十七章 無産者の強制執行の執行無効の執行中止	535
第三十八章 無産者の強制執行の執行無効の執行完了	550
第三十九章 無産者の強制執行の執行無効の執行取消	565
第四十章 無産者の強制執行の執行無効の執行無効	580

以下を註に解れたる箇所は赤インキにてマークを致し置きたり

貧乏讚

資産階級の兇暴到らざるなく無資産階級の自覚急なる現代の社會に於て階級闘争は今や當面必至の勢ひなりさせらる戦ふものに平和あれ吾人をして暫く貧乏を讚美せしめよ

君を戀ひ知識を愛し働けりわが貧乏もかくぞ
芽出度き

雑草よ、わが庭なれば思ふまゝ、力一ぱい伸びて
見よかし

かけながら柩を送る人あらばこの人ゆゑに死
なんこそ思ふ

三四人友の寄り來ば事足りぬ、わが野邊送り静
かなれよかし

世の中の有らゆる慾をみんな棄て長湯の癖を
樂みにけり

泌々^{しむく}とわが泣語^{なみご}をきく人のひこりふたりのあ
るを嬉^{うれ}しむ

我^{われ}貧^みしく彼^{かれ}また貧^みし、相見^{あひみ}れば瘦^{うせ}せし手こりて
凝^{じつ}こ離^{はな}たす

貧^{びん}乏^{ぼう}も互^{あひ}ひによつて打明^{うちあ}けて語り合^あふ夜^よは心
和^なみぬ

貧^{びん}乏^{ぼう}に窶^{くわ}れし妻^{つま}を自働^{じどう}車^{しゃ}に乗^のせて遣^やりたき花^{はな}
の咲^さく日^ひよ

貧しければ貧しきまゝに牽牛花の種も買ひ
て夏を待ちけり

水にもまれ藻の花咲けり憂ひ湧けば河岸に來
てひこり眺むる

われひこり富むを欲りせず人並に貧乏をして
暮さむよ妻

二三時間机に對ふ日のあれば長者の藏も欲し
からぬかな

露西亞

戀人の熱疾めるごこ懐かしく惱ましきわが若
き露西亞よ

星明り、草波うてり、その涯に莫斯科にゆく途の
ありなむ

巨いなるザラツスツラの足あみを曠野の草に
見出でつるかな

びつしよりこ、寝汗流れたり

窓掛に

黎明の光薄ら戦けり

死ね死ねこ、眩きて寝てしまへり、我にこも人に
いふこも分かなく

血の如き色

血の如き色より暗黒の濃きを戀ふ無産者階級
の先登の旗

無産者階級、無産者階級を叫び出す、深夜の街の
黒き我影

次いで来るものを教へむ、米暴動、流行感冒、同盟
罷業の後

我等みな貧乏であるに一致せり、此階級の奮ひ
起たむ時

虐げられ苦められ今ぞ奮ひ起つ、最後の勝利、貧
乏にあれ

生爪を剥ぐが如くにその人を我より裂きて商工階級の手よ

地を蹴つて起つべき力何處にか在るをし恃み
初雷をきく

友はみな資産階級の靴の紐を解かまく去れり、
冷笑、頬に上る

慰安會、高利貸の顔を會場に見て折詰を蹂躪り
去れり

百合の清き芥子の紅きを念ふこき、無産者階級の道あらばあれ

いつまでも忍びてあれば頼に上る微笑さへ物に慄ふが如し

偉なるかな、資産階級に反逆の旗手たる君の瘦せてゆくこき

大空を仰ぐ癖あり、妻をもてぎ、帽子あみだに、冠りて止まず

五人の死

大正八年七月廿二日未明東京市の一賣業者、妻子五人を順次絞め殺して已れまた縊死せんしその細紐断れて果さず、原因は生活難

順々に絞め殺せりよ、宰相よ、民食はれねば斯くするも善きか

大臣には新妻のあり、彼の手に唯ひミ筋の細紐のあり

何を爲れば生きらるゝものか働けさ働けさ人の食らひ得ぬ時

小作人の死

山城國綴喜郡三山木村の小作人に市川龜藏なるものあり、父祖相續いて他人の田畑を耕作し糊口し來る。地主某、龜藏に無斷にてその田畑を他に賣却の約をなす、龜藏これを聞知して泣いて己れにこれを譲り渡されむことを乞ひ百万金策に奔走せしも地主階級一致して金藏を許さず。平素彼が普通選舉に小作法制定の熱烈なる運動者なるを憎みて也、龜藏竟に同村の溜池に身を投じて憤死す、時に大正八年七月某の夜、彼即ち一死を以て小作人の自覺を促し我國に該運動の喚起されんことを期せるものゝ如し。爲政者よ。聖代の悲劇はなんぢが有資産階級の利を計るに汲々たる間に平和なるべき農村にありてさへ、斯く深刻に演出されつゝあるを見よ。

生れ落ちて他人の土地に鋤りて流せし汗の
値知る時

手の鋤をいづこに入れむ、一塊の土も地主の足
跡のある

耕さん土地は無くなれりけり、
さらばなり。
この鋤もこの鍬も
この……。

己が手に作りし米を食ひ得ぬ疑は死こそ解く
べかりけれ

妻の笑顔、
兒の笑顔、
父も笑顔して家を出でたりけり。
何を笑みにけむ、

暮れ残る地主の蔵の白壁を眺めて彼や夜を待
ちにけむ

試みに小石を投げて溜池の波紋をすかし見た
り、星明り

身をもつて日本にほんの小作運動せうさくうんどうの刺戟しげきたらんす恐おそろしの音ね

「われに随したがふ者ありや」

「主しゆよ、誰たれもなし」

否いな。一人ひとりのこゝに起たつある

溫情主義者おんじやうしぎしやへ

粥かゆに水みづを増ませば足たらむこいふ如ごとき溫情主義おんじやうしぎに唾つよして來こよ

この頭かぶ温じん情じやう主義しゆいの人の掌てに撫なでらるゝには硬かたし尊たふさし

一人いちじんの叫こゑぶものなし、同盟どうめい罷工はいこうの止やまんこする
夜よ蒸じ々じ々じ暑あつし

大學だいがくの門もんを潜ひそりて

劈頭はつとうに無な産さん者しや階級かいきふの大學だいがくを建たてよかし世界せかい改かへ造ぞうの朝あさ

二十世紀に奇蹟出でよきいふ如き宣誓式の偉
なる訓示よ

宣誓式の訓示なき偶に憶ひ出で生欠びする宿
直の夜

月謝滞納、貧しき者を除名する學校の揭示眺む
るも秋

富豪の子の外こゝに入るなかれ、資産階級の大
學の門

記者として大學へ

うやくしく禮すれど帽子得も脱らず、新聞讀
まぬ博士にやあらむ

金相學教室竣工の日に

成金のいみじさよ、京大理學部に赤煉瓦一棟聳
立ちにけり

生 活

峻阪を馳せくだる勢ひ、一氣に書きつ放せり、締
切

むつつりこ来てペンを執りむつつりこ去る時
我の低き靴音

前へ、後へ、自動車去りまた来る、夜勤がへりの泥
濘

あはや、慥き殺さんこし衝こ去れり、街燈に照り
廻れる轍

數知らず他人の自殺の記事書きしわが死ぬ時
のいかにかあらむ

枕もこの新聞をまづ寄せて見ぬ朝のをぐらさ、
なほ降り續く

顔 烈しく叱らんミし口を緘めり薄給に骨立ちし

垢づきしカラーを頸にあつるミき太息つけり、
斯がて家を出る

こりこめも無き日は暮れぬ斯くてわが一生も
竟に暮れんミすらん

締切の鈴は響けり、手より手にわが原稿紙飛べ
る涼しさ

短夜や十三臺の輪轉機一齊に響き白み初めけ
り

初夏や檢舉府政に飛火す、全市の記者の色め
き立てる

田舎訛りの通信員の電話きく梅雨に入る日の
生欠伸かな

敵

男おとこなれば敵てきを作つくるこ戀こひ人ひとを得えるこに我われのしづ
心こころなし

その教おしいこ尊たかかり生なま甲か斐ひのありこいふここ敵てき
作つくるここ

負まけてもよし此こゝろ世よ間かんにも唯ただ一人ひとり唯ただ一人ひとり我われを戀こひ
ふ子このあれば

敵ばかり多き我かな、嗜昔まで戀ひしも竟に背
かんこする

唇をいたくな嗜みそ敵多き身には尊し、一滴の
血も

病床語

大正七年十月流行感冒を病みて京都府立病院に入る

灰かにも愁は來る、白菊の黄なる色にし頸垂る
朝

わが窓の椎の大樹に風渡る聲に今宵もいねや
らぬかな

目覺むれば食べ物のごき君のごき君が別れに
云ひませしごき

この秋のインフルエンザ君を戀ふたもひご孰
れ烈しかりしや

出町橋、コンクリイトの灰色に疎ら雨して暮る
、秋かな

寝ねがたしこの寢臺しんたいにいくたりが死しにけるや
なき思おもふ秋あきの夜よ

朝あさかな
ゆく秋あきや川かは向むかひより荷車にぐるまの音おとして明あくる霧きりの

病院びやういんの夜よの廊下らうかに氷裂こほりさく錐こしのひゞきし夢覺ゆめさめ
にけり

たそがれの病院びやういんの壁かべさむざむこ屍體室たいたいしつより吹ふ
く秋あきの風かぜ

何事か思はむこして思ひ得ず、電燈の灯に太き
息する

病院の夜の狭霧は悲しけれ寝返りすれど消え
んこもせず

温度表みて溜息す、山脈のラインの如く熱の續
くに

何もなく涙含ましく腹立たし、わが病室に光る
秋の陽

わが家にわれこ間借りをせる如きさぶしさ悲
し秋風の日よ

また感胃に人の死にける噂なきひそくこし
て更け渡りけり

忘れ居たるむかしの戀が身に泌みて戀しき日
なり、病の床に

いこ強き彼のニイチエの警策も疎ましきぞ思
ふ病みぬる百日

岩倉精神病院にて

し
師走の夜、岩倉精神病院の門を潜る
私の心静け

闇の中より我を殺せと叫び出づ
廊下には誰か
上草履の音

先生、先生、地の底よりや湧きにけむ
壁にほやけ
し人間の影

雜室の患者のうち
に寝ねてありし銀杏返しの
眞白き頸

秋風や病に瘦せし額
破らむ銅の柱をたづぬる
思

ゴルキイを憶ふ

千九百十九年夏死刑に處せらるるその説あり

恐しき夢にてありき枕も
この燐寸を探り何か
手に觸る

ゴルキイよ、貧乏の子は君思ひ初戀の如く涙流
せり

ゴルキイの額ある部屋に夜業するわが唇はい
つも湯けり

無産者 下篇

續貧乏讚

成金を思ふぞんぶん罵つて錢の無心を言はで
歸る夜

月の夜の軌道光れり、我いつしか踏切に来て茫
こゝろ

腹這ひて空氣枕に呼吸を吹く此一瞬の足らひ
し心

湯に浸り歌を思へば貧乏も意義あり、心平和な
るかな

女湯の囁しき聲湯に浸りきけば眠たくさぶし
くなりぬ

彼語り我語り夜は白みそめぬ出がらしの茶も
此時やよし

隠袋の底をさぐりて微笑みぬ葉巻を購ひて家
に歸らむ

空腹を抱へ友より友を訪ふ心寂しさに逐はる
ゝ如し

妻こもに簡易保険を掛けむなき思ふも貧に
馴れ來しものか

汗しき山又山を辿るごまわが貧乏の涯しな
きかな

わが庭にふさへるほごの花もちぬ、その紫も薄
きあぢさる

われごわが心弱さを責め募り泣かむごせしが
いつか寝てけり

貧乏であれかし人ご争はず微笑を含みてなほ
忍べかし

偉なる事業興さず惜まるゝ身にてもあらず死
に易きかな

世のこゝがみな嫌らずほんやりこ家に歸れば
電燈の點く

惚つほき男なりしこわが撰むわが墓碑銘ぞを
かしかりける

終電車ぎの吊革も人の手に縋られてあり君に
縋らむ

寂しさの心の奥に宮ありてその宮にこそ君の
おはすれ

借錢のこまを案じてその果が貧乏讚の歌こな
りけり

米暴動を憶ふ

成金の羨ましさよ、賣り惜み、買占むるたびの太
き儲けよ

試みに、米暴動前一年に如何に彼等の備けしを
思へ

物凄き聲にてありき、闇黒の街をゆすりし群集
の叫び

またしても群集の前に迫りたるわが軍隊の由
々しさを思ふ

軍隊出動すに、電話慌しいま騒けばきて何こな
るものぞ

ぢりぢりこ際下の赤子肺を病む如く瘦せたり、
成金の前に

恐しき突貫の後、銃剣の血の滴りを誰れか拭は
む

この路次に米暴動に引かれたる父あり子あり
— 凝ミイむ

な恐れそ、ダイナマイトはこの國の商工階級の
爲め山に石割る

徳川公の貧民窟視察

勿體なき矛盾なるかな、公爵であり貧民の友であること

貧民よ、業を休みて道を掃け、公爵の君の成らせらるゝ日

手に石を擲む勿れ
こゝに、渡らせ玉ふは
十六代將軍家達公なり

おん視察、貧民もは空つほの腹を抱へて迎へ
けるかも

いさ貧しき身にも權威に屈せざる骨を抱きて
大空を見る

東海道線衝突

大正八年夏その日成金某即死重軽傷者夥し

汽車衝突、寢臺車先づ碎けたり、この災の皮肉な
るこも

金よりも尊きものゝ存在を知るべき彼は冷たくなれり

恐ろしき響に次いで呻吟けるは獸にかあらむ、手探りて見よ

汽車衝突、驀然として同じもの同じ力に相撃ち
にけり

相均しき力許さば汽車の如く衝突せんす身は
粉こもなれ

汽車衝突、唯一人の商工階級を倒して夏の夜は
白みけり

社会記事、大なる活字現れてわが成金の奇禍を
悲しむ

三等車

三等車、わが階級の雑音のねむりを誘ふ快さか
な

蝦の如く身を屈めて寝ねたりしか、三等室の窓
灰白めり

手荷物に凭れて妻は坐睡れり、暴風雨の夜の三
等車

洗ひ晒しの浴衣を着たり
兒を抱きて
揺られてありき夜の三等車

老いたるも若きも交り興がれ、櫟の葉吹く風
頻り

丹後路

駟けぬけて立ちごまりては我を見る山の少年
の顔のいくたび

波しぶく巖の上の雑草に交りて咲ける曼珠沙
華かな

波の音にひたりて物を思ふ間に腕車いつしか
山路に入れり

わが車夫の背に滲む汗をみつめつゝ揺られて
ゆけり黄昏の路

波の音に、草吹く風に、追憶はこころ定めず君を
呼びにき

君を思ひ、君を思ひて迎る松蔭に、秋の花の零れ
て止まず

與謝の海、阿蘇の海、暮に溶けあへり、わが心われ
に絶りて泣かめ

山の灯にわかれ港の灯に逢へり、丹後の秋の夜の静かなる

昨路、里の灯の見ゆ灯の影に君をし置きて心哀しむ

行く年

因はれしわが心より色艶もなき一年を送れり、今年も

唯悲し泣かんすれそその事の何もし解かぬ
年の終の日

落着いて讀書するこみなかりしをこの一年の
悔にするかな

病多く事多かりし年君を得し年なりしかな除
夜の鐘鳴る

君を得しここ一つあり憎からぬ年はなりて
暮れて行くかな

追憶は白帆の如し、わが胸の波立たぬ日は凝こ
浮びぬ

追憶は樂しきときも憂きときも君のみ胸を慕
ひ寄るかな

人間の血

人間の血の滴りよ、情死の談聴くほぎ懐しきな
し

涙もて袖を放たむ、彼女をわが貧苦より静かに
去らしめ

涙また拭はむとせず、貧しければ彼女も斯くは
去りゆくものか

兒ありわれに縋り
父あり我を撻つと
烈しく泣きし女を忘れず

いみじくもなほ戦ふと云ひ得たり、この貧しさ
を君戀しさに

飲^のむ毎^{ごと}に酒^{しゆ}量^{りやう}は上^ある、悲^{かな}しくも逢^あはぬ日^ひ毎^{ごと}に戀^こひの募^もり來^く

たま^まく^くに微^ほ笑^まむこも悲^{かな}しかり、戀^こひなし人^{びと}の夜^よの長^{なが}さよ

異^い安^{あん}心^{じん}

君^{きみ}ゆるゑに生^い命^{めい}墮^おせば足^たりぬべき空^{そら}恐^{おそ}しの異^い安^{あん}心^{じん}かな

なにごこにも

おごおごする身、思へば涙含まる
ようも今日まで生きて来りしこ

わかればなしが

唇にのほりしその夜から

死なねば二人は別れ難くなりぬ

別れむこいふさへ君を戀ふるゆる、君に戀はる
、身ミ思ふゆる

またしても

小兒の如くむづかる我の
機嫌をさる妻の笑顔哀れなり

あきらめの
底より涙^{なみだ}しみ出^いでぬ、
たこへば啖^{たん}に血^ちの混^まるごこ

生^{なま}甲斐^{がひ}のある身^みなるかな

君^{きみ}ゆるゑに

この苦^{くる}みを凌^あがんごする

戀^{こひ}を棄^すつれば

あゝまで荒^あぶものよなご

人^{ひと}ごこのやうに言^いひてあれごも

月^{つき}に泣^なき、青^{あお}葉^はに泣^なき

君^{きみ}ご逢^あひ初^{はつ}めしより

耻^{はづ}かしいほご、私^{わたし}は泣^なき虫^{むじ}ごなりぬ

食べさして
貴へば不足は云へぬものかこ
唯ひここみ洩らせし妻の言葉

電燈に緋の衣蓋ひ血の如き光に寝ぬる春の夜
かな

流離

數年前著者も朝鮮にて店員生活中の詠を蒐む

鴨綠江結氷し始む——驛に來て揭示眺むる十一
月の夜

馴れぬ土地に馴れぬ厚司の膚にひしきひしひ
しき迫る結氷期の風

家も賣れり、女にも別れたり、始めて纏ふ厚司の
糊の香

港の灯、始めてひける荷車の音を止めてほろり
こなれり

ブランドイを飲むことを覺わたり、厚司一枚の
朝鮮の冬

酔へばなほ色蒼ざむる寂しさを他郷の酒に味
ひそめき

仁川の五間まぐちに錢のほか物知らぬ子に寄
りて年経る

親まさぬがせめて安かり厚司着て慄へながら
に年を送れば

厚司着て漂浪ひぬれば身に慚ぢぬ生れし國を
戀ひしに云ふも

腹立たし、奉公人の苦み、錢のここのみ綴り來
し日記

またしても冷酒の酔の頬にかゝる朝鮮街の梅
雨の狭霧よ

賀茂わたりの水の音戀し、温突の軒すれぐに
葵の咲けば

名も知らぬ黄海道の小湊にわが船かゝる月の
秋の夜

雪曇り、北朝鮮の壊れたる都の涯に君をおもへ
ば

消息のあれば、なければ、いやましに友の戀しき
流離の心

花いづこ舊城壁の石だゝみ、壊れしを月に
かこぞ見る

夜着かづき月見す蟲の聲きかず、温突に犬の如
く病みたる

浅緑港あさぐりみなと杳はるかに斑あまのごき氷こほりながるゝ彌生やよひこな
れり

商人あきんどこ人ひとに呼よばれて朝あ鮮せんに六む年ねん住すめりけり今いま
宵よの月つき

六む年ねんすめき旅たびの思おものさりあいぬ港みなと烈はげしき潮しほの
満みち干ひよ

温突あつの蒲團ふとんのなかに骨ほねだちし胸むねを抱いだきていか
に泣なきけむ

あゝ蟋蟀、われは臥床に、汝は戶外になく朝鮮の
夜もありにけり

春寒や厚司纏ひて慄へ居しわが前身を思ひい
も寢ず

われと共に朝鮮に働きし年下の友あり

弟も懐しみけり、その子また内地に去れり寒
き沖の火

春の日や商品棚の鐘詰の彩色鏡のまばゆきが
ほご

故郷を捨てし子なれど電燈の白き光に寢覺め
てあれば

明治四十三年の初夏病を得て一度朝鮮より歸る

病みてあれば故郷なれど手枕に平ぞするこ
なけ子規

黙
禱

燈火よ油盡きては疾く消ゆる汝をうらやむ—
長き夜かな

あふり落つる涙の底によき國のありこし頼み
ひた泣きてあり

皆懺悔人を泣かしめ我もなく現世の旅を導き
玉へ

蝕みし選擇抄や寝ねがてに燈火こりぬ風のや

われよりも貧しき人がわが金を盗めり、彼に平
和のあれ

我をして裁かしめされ、友の手を握れば熱き涙
まづ出づ

迎り來し道悲しくも分れたり、いつちに行かむ
秋風の中

夜もすがら濃霧のうちに鉦鳴らす假泊の船の
如き思す

風や名もなき寺の鐘にふれ舊る夢さましよき
音してけり

ふる堂の柱に懸けし普門品悲願身に泌み繰る
夕かな

普門品わが誦む聲にわれ泣くこの元朝よ何
の故ぞも

弱ければ嬉しきこも泣かまほし涙いよいよ
新たなれ春

躓けば躓くなべに大慈悲のおん手に縋る身
なりにけり

乍^さ麼^ましても考^{かう}へられず、御^み佛^{ぶつ}の力^{ちから}の外^{ほか}の我^{われ}さ
い
ふ
こ
こ

佛^{ぶつ}飯^{はん}の残^{のこ}りを遣^やりて雀^{すずめ}の子^こ、雀^{すずめ}の親^{おや}に馴^な染^じむ庭^{には}
かな

月^{つき}光^{くわう}よ、いづちの涯^{はし}に流^{なが}れ寄^より溶^とけむこすらむ
二^{ふた}つ^の心^{こころ}

われもまた死^しぬこ云^いふ事^{こと}思^{おも}ふこき心^{こころ}安^{やす}けく寝^ね
付^つかれにけり

寒題目

佛燈は眞白らに照りぬ、參籠の法鼓ぞ動搖む雪の法華堂

牢の御書感涙いこゝ堰きあわす、歩々題目す雪の段

南無妙法題目冴ゆる法華堂に大白蓮のごこ雪つみぬ

寒行^{かんぎやう}や法華^{ほふわ}題目^{だいもく}の千卷^{せんぐわん}に吹雪^{ふき}こなりぬ堂^{だう}の回^わ廊^{らう}

戦^{いくさ}かる、闇^{やみ}の御堂^{みだう}の圓柱^{まろはしら}寒夜^{かんや}によりて罪^{つみ}をおもへば

此^{こゝ}經^{きやう}難^{なん}持^ぢ、越^こ後^ごの空^{そら}の雪^{ゆき}曇^{ぐも}り御難^{ごなん}のむかし偲^{しのは}る
宵^{よひ}

春^{はる}の日^ひに金泥^{こんでい}眩^{くら}き大太鼓^{おほたいこ}華^{はな}こそ降^ふらめ君^{きみ}の打^うてれば

華^{はな}ぞ降^ふる壽^{じゆりやう}量^{りやう}品^{ばん}こそ尊^{たふと}けれ甲^か斐^ひ紫^しに暮^くるゝ夕^{ゆふ}
座^ざに

おもへらく、大^{だい}日^{にち}蓮^{れん}もわが如^{ごと}く泣^なきけるものか
人^{ひと}し^し在^あらねば

中^{ちゆう}年^{ねん}の顔^{かほ}

遠^{とほ}き火^ひに手^て焙^{あぶ}る如^{ごと}き戀^{こひ}をする中^{ちゆう}年^{ねん}の顔^{かほ}をいづ
こに棄^すてむ

妻はあれど、妻には戀の湧き得ざるわが家の宵
の灯は悲しけれ

逆る熱き涙よ、中年のわれなほ戀に生きむす
なる

風や君もの云はず君がいふそれを想ひて我も
黙す夜

わが心われこやさしく傷々し、君思ふこき歌お
もふこき

秋あきされば薄うすの葉はすれ、蟲むしの音ねも、戀こひなし人の泣なく
如ごときかな

憂うれひの芽め、苜かれさもふきぬ晝ひるも夜よも泣なけさ涙なみだの
絶たぬそのごこ

詫わびしさや添そひ來こし妻つまの缺あ點らばかり心こころに滲しみ
て年としのゆくごこ

短ひさ夜よやわが功名こうめいも戀こひの血ちも石塊いし洗あふ水みづかみ見み
ゆれ

貧民窟

佛前の御燭よりも懐かしき貧民窟の宵の灯影
よ

櫻櫻爛漫さくらさくららんまんさし咲く貧乏びんぼうの人間にんげんひそり居るゐここ
ろなし

かくまでに貧まじしさはいへかくまでに働はたらきてあ
り安やすからぬかな

わが如き寂しき人の有りや無し、十三家族住める此家

貧しさを尋ねて行けばドン底に人あり、我の如く瘦せたる

泣きぬべし泣くべし泣けば足りぬべき我なる
ごとし、蟲籠の蟲

草籠に白萩まじり貧しさのうちにぞ君の微笑のよき

鼠の子、一塊の古綿に重り合ひて眠り居たりけり

ふり返り見れば母子はなほ地に額づきてあり、
辻をまがらむ

所有主

一人の所有主のなき大空をうち仰ぎ心慰むる
なる

われひこり生れたるごき生きんのみ、大空の下
に何を憚かる

わが拳、鐵の扉も碎くべし貧乏の意氣さかな
る哉

芽を吹けば樹々みな青し、君思ふ心いつしか戀
こなるごき

大木の倒るゝ音に霧深き飛弾の空こそ白みそ
めけれ

雁來紅、十八にして戀知らぬ君に咲くべき花にかあらむ

小春日和君が家近み蓼咲ける畔の鳴子を引いて過ぎけり

瘦せてあれきダイナマイトに導火さすほどの力はありこそ思へ

腹立つとき僅かに生のいのち知る不治の憂鬱よ、何に禱らむ

そこに此處に
いかに多くの善き事が藏されてあるよ、
雑草よ、花よ、

五歩の庭、一めんに青し、夏來れば王者を凌ぐ生
命地を出づ

無産者の跋

河上肇

貧民は古へより此地上に住へり。されど現代の
無産者は、又彼等持一の社會的及び精神的環境の
裡に在りて、獨り彼等のみに屬する持種の悲と、憂
と、怒と、將た和ぎと、諦と、望と、誓とを、其心の奥に藏
しつゝあり。今、當に彼等の爲に、之を歌ふのみなら
ず、更に彼等に向つて、人生の理想を示し、社會改造

戀 愛 篇

われをして

戀歌詠ましむ

そのうちは

この日本の

静かなるかな

百子



の使命を教ふるが如き、亦詩人の一事業たらずんばあらざるべし。歌集「無産者」一巻、果して何を成し遂げしやを知らずと雖も、著者の志は恐らく茲に盡くるに非ざらん。第二、第三の歌集を得て、彼の事業の尋常一様のものに非ざるを知るの日あらんことは、獨り余の希望たるのみならず、又著者の所期たるべし。乃ち巻尾に題して他日の證と爲す。時に大正八年十一月十三日夜、十二時を過ぐるこ
半。

初^{はつ}
春^{はる}

いさゝかの手持無沙汰よ、初春は君の姿の美なるこそ過ぐ

替衣裳、錦の帯をぬむる間にわりなや雪の降り出でにけり

年賀狀君がおん手こわかぬまで男めきたる心
憎さよ

口紅の厚きを初春こ思ひけるその頃いまだ君
こ會はざり

初春は後朝さへも笑顔して送るこいふが仇め
きしかな

春の灯やまたしても見る色紙に綴れる君の消
息なんご

手に觸るゝもの盡く碎かんずわが怒りにもな
れ王ふかな

除夜の鐘都にきけば麗人の薄化粧して名むけ
はひ

初春や日記の紙の白きにも胸躍らせしわが身
なりしな

三味の胴冷ゆるこまかな別れては悲しきこま
を唄ふ夜かな

廊の灯は優しきものよ君が頬に屠蘇の酔さへ
うつし出でけれ

いつまでも上の句のなき歌詠みてありなむも
のか春は返るに

相見ねば喪にある如し昨日今日氷雨の續く松
の内かな

日よ 第一歩既に誤つわれをすら振起たしむ新なる

黒

髪

髪を結ふその間に雨は降りいでぬ、今宵は濡れ
て君に會はまし

結立ての髪もほつれぬ春の街いつまで我を待
たせますらむ

〓
り

水のごこわが手枕をひたしつる黒髪の香を戀
ひ渡れども

髪ながき少女購ふ料にも金人鑄りし王にや
はあらぬ

〓
7

揚雲雀、汝がめじるしに黒髪を解き放たまし春
の野の風

黒髪くろかみのみなごに泊はつる月代つきしろの光ひかりかも、眩はばき玉たまの
小櫛せよ

黒髪くろかみや金きんの小櫛せを滑すべるこき、春はるの光ひかりの流ながれ寄よる
こき

相あ思おもひ相あ會あはぬ身みに何なにあらむ、この黒髪くろかみもきり
て棄すてまし

日淨尼にちじやうにの君きみへ

白梅しろうめのかをりに泌しみみし琴ことの譜ふに髪かみを束たばねし君きみ
にやはあらぬ

白梅しろうめやみ髪かみおろせし彼かの姫ひめも寝いねでおはさむ
京きやうの春寒はるさむ

君を戀ふこ

君を戀ふこ言ひしばかりに斯くまでの答をう
くる身こなりしかな

無情ければつれなきを戀ひ涙また涙を誘ひ止
むよしもなし

撻ちたまへ心ゆくまで撻ちまさばわが爲め君
も泣き玉ふべし

わが思ふここ盡くしるされしおん玉章よいか
に復さむ

君が家に積るこしればかくばかり戀しきもの
か春の夜の雪

戀すれば悲し、戀をも棄てぬればいかに悲しき
日の來るらむ

われ死ぬべく戀す云へさなほ解かぬいさ美
しき唇の主

徒らに待つこは知れぬ君故にすこす一夜の憎
くしもあらず

やんごみなき君を慕ふは山の子が海の姿を戀
ひ渡るごこ

その電話さくさへ斯くも胸躍る、聴かねばいか
に悲しからまし

あめつちの嬉しきこを鍾めたる吐息なるら
し春の夜の風

このわかれ、永久の別れを思ふまで行く春の夜
はものゝ悲しや

相見ねばたゞ一刻も堪へぬ子に嬉しや二人死
ぬこいふこと

死ぬこいふことさへ君が臂を把りて語れば懐
しきかな

女
心

白粉の厚き薄きも移り氣の君ゆるにこそ思ひ
亂るれ

泣く聲もよそに漏らさじ、おこなしう泣くを教
へし君にやはあらぬ

ふりかへり帯の太鼓に手をあてぬ、青きも交り
散る柳かな

鉢植の紅梅のごこ可憐しき京の女ご生れつれ
ごも

人ひこり通らぬ路ご雑踏ごいづれ嬉しき御手
に絶るに

八百屋の灯、煙草屋の灯も避けてまし、二人の歩
む宵の浅さよ

御手をこるここさへ後の前後、見てはためらふ
隠しびこかな

またしてもおん手を分つ悲みを漫歩の胸に覺
ふる

泣黒子、それを可憐し、いふ人のありしを思ふ
鏡臺の前

溜息、安き寢息や、思ふ子、思はぬ君、こある一
つ部屋

溜息はなべて少女にある慣ひ、優しう問ふて泣
かせ玉ふな

俯目勝にこの年ごろを送りきぬ、花の散る日も
花の咲く日も

口紅のいろを、おん唇に遺し置きて嬉しき春の
夜のくだちける

くちづけはくちづけをもて返すべき少女の道
をふみぬ君ゆる

女をんなより女をんなへ

女をんなより女をんなにゆきてわがこゝろ春風はるかぜのごこ止とどま
らぬかな

戀女こひをんな千萬人せんまんにんにすぐれたる艶えんなるを得いて生命いのちす
てんず

唇くちびるを與あたへ頸うなじを與あたへたり、今はたわれや何なにを與あたへ
む

この上うへに何なにを與あたへむ、別わかれてふものを飽あくまで
秘ひめてあれども

ありこある女をんなの姿すがたみな生きて流ながるゝごこし初はつ
夏なつのかぜ

緋の夜着に舞妓の寝顔十あまり白く浮びぬ京
の朧夜

おほろ月、鴨ミ高瀬を前後、短册に似し街を照し
ぬ

紙屋川、梅のかをりに流るゝ日、君がりわれの通
ひそめし日

紙屋川、君ミ浮名を流すには宿世ありけるよき
名なるかな

この廓機織る音に明け初めて梅のかをりに黄
昏るゝらし

雪解のみち、君に別れし後朝の心に似たりしき
けなきかな

百人の艶女を乗せて世之介は紅の帆を張りに
けるかな

いさゝかは濡れまほしけれ春の夜の踊り姿の
君を待つほぎ

夏劇、棧敷の君が蝶々の冴にしひかりや銀の元
結

花車、籠に似たる君乗せて押せばあやにく花は
零れぬ

花曇り、寝くたれ髪も結立も惱ましきもの、朝
の廓よ

行く春や七日に足らぬ流連に君の姿の媚びま
さりけり

電車には離れて乗れざわが胸の君が衣香にこ
きめくも夏

一さきも女のこころを思はねば若き心は虚なる
かな

縁日の街のあかりにさまざまの女の顔を見て
歩く宵

大和路

掌を合せふたりの戀を祈るべき御佛をこそた
づぬる大和路

寧樂に來れば落花の風が暖かに重けに四つの
袂をぞ吹く

涙多き身なり、うれしや我に似し君なり、ふたり
大和には来ぬ

長谷寺にて

廊 牡丹みな青々として六月の日影冷たき石の回

無 桔槔水に影映す朝雲のゆくへやあはき畝傍耳

戒名

禮譽妙讀智月禪定尼三回忌の命日に

三回忌、こちたく長き戒名の馴染みてさらに懐
かしき君

朝月夜、水鶏の音きくうれしさに悲哀そひぬ君
を祀れば

この三こそ、をかしくなきに笑む癖のつきたる
我をあはれこそ思せ

短夜や一首の歌も詠み得ざる便なさに似る君
を思へば

花ちる日祇園はさびし友禪の蒲團に寝むさわ
れは思ひぬ

筆染めし彼の妓の三味の裏皮のバイロンの詩
こそ識をなしけめ

こほろぎよ、逝きぬる君の清元の美音を偲ぶ月
の夜すがら

清水と祇園の外は知らで逝きし君いとしさよ
高麗の雪の日

北州や誰が連弾のはなやかに雪の祇園の小夜
更けにける

行く秋や君に別れし酔覺めを祇園の街の灯の
淡さかな

立待月や橋の袂に物乞はる、秋の夜さびし祇園
にゆけさ

月夜よし、濃島田の君に添ひ虫聴くほさの挿話
のあれば

白桃やこの小机に君を待つ宵の嬉しき春もあ
りにき

二人たゞ蕾の如く相抱き落花にも似て別れし
ものか

高髻の鬢の影さす君の頬をいつの夜よりか戀
ひわたりけむ

廓の子に涙の痕を見られつる愛たてや春の宵
の灯

悼幻光女孩

生きてあらば、この向日葵の花よりも丈伸びて
あらむ、可憐しき兒よ

白帆

紀州鉛山温泉に遊ぶ

白帆張る男をかしこ、帆柱の蟬の音よしこ、文し
てまるる

朝潮に藍青の海や二反帆の白鳥のごみ透きて
こほりぬ

舟唄にねむり白帆に京の夢うつら覺めぬる濱
の湯の宿

京思ふ人の假寝や欄に波の音ひくき晝の雨か
な

ほこゝぎす薬王林の崖つゞき素足詣での人泣
かせける

艶女

血を見ねば笑まぬ艶女の顔に似たる心を持って
る悲しさ

春來ればこの島國の街の子は寢足らぬ如き詫
しさに滲む

くちづけの夜をこそ偲べ、主知らぬたゞ一筋の
落ち髪なれご

川東、かの卯之助の館にも夜霧ひたしぬ、行く秋
の夜

清水や月の御廊に銜しぬ、わがあし音も、君が登
音

松江三首

蚊遣り火や出雲の國の祭なご語りてあれば明
け易きかな

松江大橋、新大橋の二つありて出雲の戀の通ひ
路やよな

夏祭、水の松江は百艘の白帆の影ゆ、ほの明りけ
る

君や勝ち、我や負けたる春の夜の嬉しき戀の論
ひかな

花をふく風かき君の影すきぬ祇園の街の宵の
自動車

ほこゝぎす、苦吟あだかも汝に似つゝ笑みて書
齋の燭剪りにけり

我をさりし君の心をわだつみの涯の帆かけに
見ては泣下す

鶯は鳴かず女は戀知らずさびしや石のごま春
暮るゝ

日毎葉は葉に重なりて青々々繁れご君をかく
も戀ふれご

祇園祭

宵宮や祇園の鉾の萬燈の脈うつ如く瞬けるよ

天満祭

夏祭若き浪花は百艘の篝火に炎わて生きて美

加茂祭

夏祭土の香しめる森蔭に素絹の幕のうちてあ
るかな

鬢の香や紹麴の裾の鏡立、優し誰が手にふれけ
るものか

雪明り、母の看護に寝れたる君の寝顔の仄白み
見ゆ

緋衣きてわれはも舞ふにふさひたり、銀燭めぐ
る春の大床

知音

夢二氏の渡米すま云ふに

亞米利加に行くこいふこころ君にして新月を見る如きめでたさ

彼地にも布き玉へ、花の散る如き哀艶極りなき

夢二式線

窪田空穂氏を迎ふ

君貧しき、きくをうれしきみ迎へたる四條の宵のレストランの灯

芽野蕭々氏を送る

宮垣町、心さびしき日は君を訪ふがならひさいつなりにけむ

故松井孤董氏を憶ふ

亡き友よかゝる寒夜は夜着かづき、柑子も焼き語りしものを

岡田道一氏を送る二首

風や壁の浮世繪錦繪の剝がれし部屋に君を思へば

君を送る君のうしろに頸垂れし女の如き京の灯

山本翁の壽筵に

たけ五丈臥龍の梅の寒蕾老たる君が春をこまほぐ

美風氏の愛兒の計に

ふこ夢のさめては父こ絶りなば絶りもせばこ
柩に泣かる

林氏の計に

數ましぬ聖なる火皿天堂の曉なれば影白うし
て

花屋敷の故夏女に

宇治の里悲しや君のなきあこに水を渡りて鐘
の響けば

出雲大社參拜

戦へ、戦へ、こ宣らすが如し、國祖の靈に額づく暴
風雨の日

稱田姫の御裔にてやありし、出雲の里、わが烈し
く戀ひたりしは

火の海へ

肘立て、わが掌にわが顎を凝こ載せたり、死を
思ふこそ

呪はしや、焔の波へ、火の海へ、わが足をひく君の
微笑

戀しきは焔ほのほに炎あわぬ、火ひの海うみの底そこにし墮おちて君きみ
を思おもはむ

じり、じり、わが胸むねを焼やきわが髪かみを焼やく臭におし
て嫉妬あやまは募もる

火ひの海うみへ君きみを逐おひ來きぬ、愛慕あいぼより嫉妬あやまに移うつる一
瞬しゅんの間まに

旅路たびぢの秋あき

丹波路たんぱぢ五首ごしゆ

朝霧あさぎりは丹波たんぱの國くにの山々やま々の壁紫かべむらさきに滲しみみて霽はれに
けり

風かぜよ、この山國やまくにの街まちにねて夜よすがら君きみを戀こふこ
傳たへね

水の音や丹波にありてわが夢に、宇治に流れて
君が枕に

丹波路は霧のうちより薪運ぶ馬の鈴の音して
明くるかな

山國の街にて人を思ふほご悲しきはなし、また
も時雨る、

琵琶湖巡り

わが黒髪、志賀の浦曲の初秋の風に吹かれて戦
ぎ止まずも

堅田の里、醬油蔵の白壁を水際にして秋たちに
けり

饗庭野は湖國の靄に白布を晒せる如し初秋の
かぜ

丸子般舳に石の班の如き水の影ひく、青き水か
な

瑠璃色の島より島へわが船は巡りゆくなり瑠
璃色の日に

瑠璃色の水は優しや竹生島、島を抱きて千歳經
にける

手に掬べば水は眞晝の日に垂りぬ、碼頭の水や
銀の雫や

京都より神戸へ

河霧や寝亂れ髪ミ手枕のうちよりわれは脱け
て來しかな

傍に君のありせば大阪のこの朝霧のいかにめ
でたき

なにごごごこの秋空に水を戀ひ海のあなたを
戀ふこいふこご

爆發の倉庫のあまは煤烟ミ霧にひたりて秋た
ちにけり

霧に濡れ煤烟にむせび荷役するこの川口も秋
なりしかな

汚れたる皿にスーフを盛るに似て霧に浸りし
川口の朝

この晝はハルピン丸の食堂に京のをんなのこ
ごを語るも

山の子は海の子は、また京の子は、斯くも興じて
船にあるかな

新開地、血の垂る如き活動の畫看板さへわれを
唆りぬ

戀愛篇の跋

厨川白村

歌集「無産者」の前半に於て、内に自己の生活を省み、ほかに社會當面の問題に觸れて、悲壯激越の調を奏した男性的詩人は、更に筆を轉じて「戀愛篇」のうち例へば

君が家に積るとしればかくばかり戀しきも
のか春の夜の雪

白粉の厚き薄きも移り氣の君ゆるにこそ思
ひ亂るれ

の如き作に、女詩人ならではと思はるゝ感性の纖
細を示した。さきに『温情主義者へ』『大學の門を潜
りて』の數章に、表現と着想と共に藝術の領域を
踏み越えずやと危ぶまれた放膽なる此詩人は、ま
たこゝに至つて聲を低うし調を柔らげて

想思ひ相會はぬ身に何あらむ、この黒髪もき
りて棄てまし

初春は後朝さへも笑顔して送るといふが仇
めきしかな

と歌うて、舊來の傳統的形式をも無視せざらんと
する細心の用意を示してゐる。同時にまた新しき
表現の道を求めんとして調いまだ成らず、整はん
として整はざる樂聲の、さながら琴の絃いづのためし
にも譬ふべき

なにごとも

おとおごする身、思へば涙ぐまる

ようも今日まで生きて來りしと

〔無産者〕篇

の如き作をも見た。全巻を通じて觀照の態度を一にしながら、しかも詩材に於て技巧に於て情調に於て、以上の如く變化に富める事が、この詩集を手にした時のわたくしの第一印象であつた。

わたくしは此 *versatility* を以て單に著者の天分にのみは歸したくない。今の不安動搖の時代に在つて、生活に於ては人として、藝術に於ては詩人と

して、騷擾の十字街頭に立てる著者が、自己の進路を見出すべく、また安住の地を確立すべく、嚮ふ所を得んとして焦躁苦悶せるそのおもかげを見たからである。しかも遂に

いつまでも上の句のなき歌詠みてありなむ
ものか春は返るに

第一步既に誤つわれをすら振起たしむ新なる日よ

と歌へる詩人に、懷疑はなかつた、究極の絶望はな

かつた。その態度は否定でもなく破壊でもなく、雄々しい不斷の勇猛精進である事を知つた。その一歩一歩は不退轉の努力であつた。建設であつた。この暗い現實主義者は、他の半面に於てまた明るい理想家であつた。

「詩」と「眞」をゑがき、偽りなき眞實感と自己表現とを基調とした點に於て、この數百首の短歌は、實は連続したる一篇の抒情詩である。かのロゼツテソチットのハッスオブライト『生命の家』を評すると同じ意味に於

て、著者半生の内生活の自叙傳とも見らるべきだらう。かくして既に過去はゑがかれてゐる。更に大なる未來があらねばならぬ。『戀愛篇』の卷頭に

われをして戀歌詠ましむそのうちはこの日の本の静かなるかな

の一首を題したる此著者の未來の詩卷は更にまた新しき社會運動の *begin* を傳へるのであらうか。さてはまた艶女が紅恨紫怨に彩どられるであらうか。深き興味を以てそれを見ようとするもの

は獨り私のみではなからう。大正八年十一月

大正八年十一月二十五日印刷
大正八年十一月二十八日發行



無產者與附

正價 金壹圓參拾錢

著作者	西川百子
發行者	京都市九太町寺町 八坂淺次郎
印刷者	京都市東川端東 福田信太郎

發行所

京都市九太町寺町
電話大阪一七〇五番
三〇〇九番

弘文堂書房

